

## 第Ⅱ章

# 城と町のすがた



姫路城下町の南東部から天守を望む  
CG制作 兵庫県立大学永野研究室・同安枝研究室・千葉大学平沢研究室

## 江戸時代の城と町

## 絵図に見る城と町

姫路城を描いた絵図は現在まで約40点が知られている。それらは城郭全体を描いた城下町図と、城の中核部分だけを描いた城絵図に大きく分けることができる。これらの絵図も用途によって使い分けされた。このほかに鳥瞰図や建物に関する指図などがある。その中から、新知見を与えてくれた絵図を採り上げて、姫路城と城下町を概観しよう。

「播州姫路城図」は本多家の家老中根家の子孫宅に伝来した絵図で、内曲輪全体を詳細に描いた大型の絵図である。三の丸にあった御殿すべてを明らかにした点で画期的な史料であった。

それまで姫路城に関する絵図資料の中で、もっとも精緻なものは「姫路侍屋敷図」(1751～54/寛延4年～宝暦4年)であった。酒井家に伝来した絵図で、最大の特徴は実測図であり、道路敷や屋敷割なども発掘調査の成果と合致するほどの精巧さである。侍屋敷図とあるように龍野町や野里町といった総構の外側に広がった町々は描かれず、侍屋敷の描写が主題となっている。

城主は帰国時に城外廻りと称して城下の武家地を巡回することになっていた。こうした絵図をもとにして、すべての侍屋敷の門前を通るように巡回経路が事前に決められたとみられる。

しかし、いくら精巧な絵図といっても、内曲輪の建物については櫓や門の外観を描く程度であった。それに対して「播州姫路城図」は、内曲輪の建物すべてを詳細に描いており、姫路城研究の基礎史料であることは誰の目にも明らかである。

この絵図は一間を三分で描いた実測分間図で、274×246cmという大きなものである。そこに石垣の高さや法、堀の幅、曲輪の大きさといった数値も書き込まれている。現存しない建物の配置や間取り、建具の種類、櫓の収納物までも記されており、とくに三の丸御殿群については、これまで個別に部屋がわかる程度であったが、御殿全体の部屋の構成が判明したことは画期的であった。なかでも向屋敷の特異な構造も明らかとなり、そこに付属する池泉式庭園が確認できたことは重要である。向屋敷は城主の遊興施設でもあったから、公的儀式が行われる本城の御殿に比べて、城主個人の教養や文化的センスが反映される

空間となるので、他の城にはない姫路城独特の建物であった可能性が高いからである。例えば、茶人として有名な酒井忠以の書いた『玄武日記』と突き合わせることで、野趣溢れる趣向の茶会席がこの庭の池と築山とその山上にあった茶室で催されたことがわかった。御殿内部の様子だけではなく、実際にそこで営まれた城主や家臣の諸芸の様子が浮かび上がることで、城郭が武家文化を象徴する歴史的施設であることを実感できる。

ただ残念なのは、建物の詳細な平面形態はわかるものの、上部構造については、



播州姫路城図 中根忠之氏蔵 1699～1704(元禄12年～宝永元)年

指図や古写真がないとわからない。そうした不明な部分を多少補ってくれるのが「姫路城下町図（姫路城図屏風）」（寛保元(1741)年以降）である。現状では4枚に分割されているが、料紙はすべてほぼ同じ幅で裁断されており、引手跡の穴もないため、ある時期に屏風として表装することを予定していたとみられる。その点については今後の検討課題ではあるが、現段階では姫路城と城外の手柄山周辺までを鳥瞰図として描いた唯一のもので貴重である。現在の景福寺



姫路侍屋敷図 姫路市立城郭研究室蔵 1751～54(寛延4年～宝暦4年)年

山南麓に孝顕寺が描かれるので松平時代であることは間違いがないが、直矩と明矩のどの城主の時期かは不明である。

この絵図では姫路城を南上空からの鳥瞰で描いている。例えば、中堀沿いにある中ノ門や惣社門などは文政年間に描かれた『大工幾蔵図』と酷似し、菱の門は現状と同じに描かれる。埋門や絵図ノ門は明治初期に撮影された写真とほぼ同じ姿である。こうした点から、この絵図に描かれた城や屋敷、周囲の景観等は想像ではなく、姫路城をよく見分した者が描いたものとみてよく、信憑性は高いといえよう。現段階では「姫路城下町図（姫路城図屏風）」が、江戸時代の姫路城を立体的にイメージするには最適な史料といっても過言ではない。

そこで描かれるのは絵幅の関係から、侍屋敷では大手門前の大名町、町人地では西国街道と豎町筋が描かれ、あとは省略されている。それでも、姫路城全体を特徴づける内・中・外の3つの曲輪構成は、藪となった土塁と堀を描くことでうまく表現され、城門によってそれぞれの曲輪が繋がっていることも描写されている。

城下町については、西国街道に沿って2階建瓦葺き建物が卓越する街並から町人地の繁栄ぶりと、天守とその麓に広がる御殿と、そして大手門前の立派な長屋門を構えた重臣屋敷群が描かれており、この絵図から姫路城の隆盛ぶりを窺うことができる。

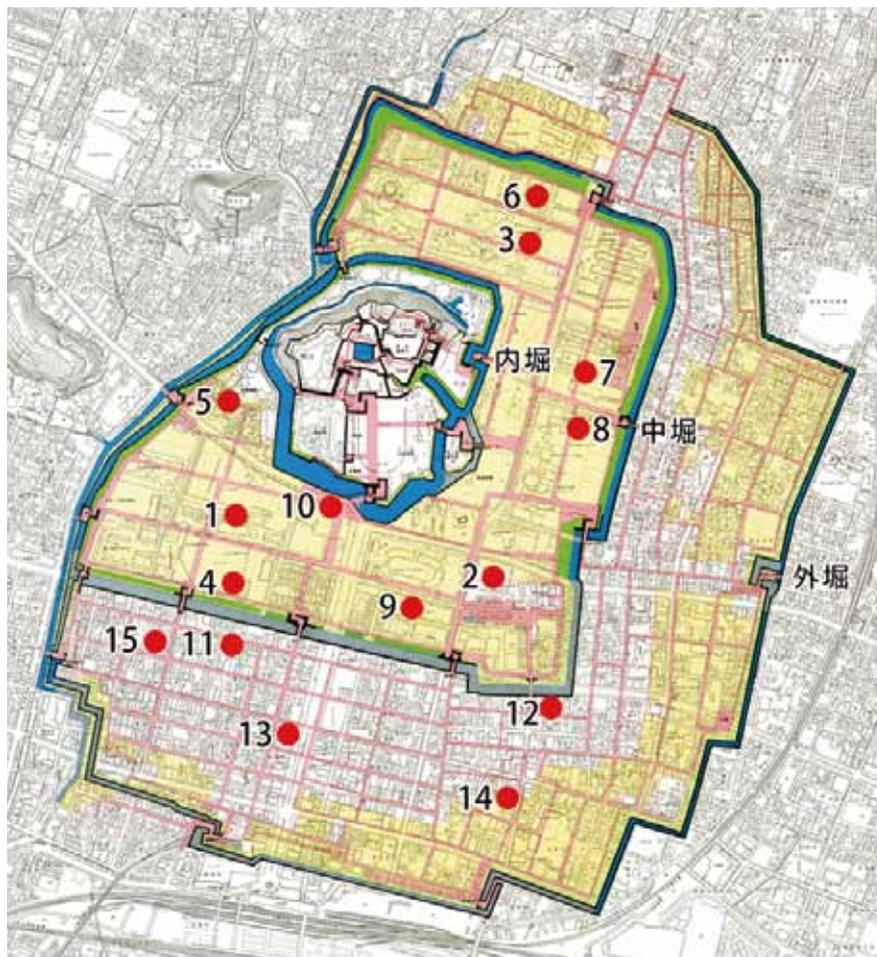
(工藤)



姫路城下町図（姫路城図屏風） 大谷信一氏蔵 寛保元（1741）年以降カ

## 発掘された城下町

1976(昭和51)年、姫路市立教育研究所の建設に伴って発掘調査が行われた。これが姫路城跡を対象とした初の考古学的調査である。以後40年、370件にも及ぶ調査によって、地下わずか数十cmの位置に眠っている、ありのままの姫路城と城下町の姿が明らかになってきた。その全容をここに述べることはできないが、いくつかのトピックに絞って姫路城下町の調査成果の一端を紹介したい。



### 主な調査地点

1. 市立教育研究所
2. 姫路郵便局
3. 県立歴史博物館
4. 市立白鷺中学校
5. 好古園
6. 日本城郭研究センター
7. 国立姫路病院(現姫路医療センター)
8. 淳心学院
9. イーグレひめじ
10. 大手門前
11. 本町
12. 元塩町
13. 白銀町
14. 北条口二丁目
15. 福中町

## ■重なり合う遺構

近世の姫路城下町では、その成立期である17世紀初頭から幕末に至るまで、大規模な盛土などによる町の改造は行われず、ほぼ同一の生活面を繰り返し利用していたらしい。街路の位置や幅も基本的に変化していない。いっぽう、武家屋敷地でも町屋でも建物の建て替えや井戸の掘り直しは頻繁に行われ、屋敷割りも時代によって変更されているため、発掘調査では何代にもわたる遺構がほとんど同じ高さから重なり合って見つかる。わずかな土質の変化や出土する陶磁器の特徴を手がかりに、それぞれの遺構の時期や関係を読み解いていくことが要求される。

## ■街路の多様性

城下町に縦横に配された街路は、町割りの基礎となるものである。外曲輪では舗装道路に姿を変えながらも、城下町時代の街路が今も使い続けられている。これに対して、近代以後に土地の形態を大きく変えた中曲輪では、地下に埋もれた街路の遺構が何カ所かで見つかるが、その姿は一様ではない。



大手門前で見つかった街路



国立姫路病院(現姫路医療センター)で見つかった街路



淳心学院の発掘調査状況

大手門前で確認した街路は、側溝に凝灰岩の割石を用いており、路盤もしっかりと締め固められていた。「大名町」の名が示すとおり、家老をはじめ大身の屋敷地に相応しい造作である。これに対して、国立姫路病院（現姫路医療センター）や淳心学院の発掘で見つかった街路では、側溝に小ぶりの河原石を多用していた。当地は「上岐阜町」「下岐阜町」と呼ばれた中曲輪東部の中級武家屋敷地に該当する。城下町を建設するにあたり、それぞれの場所の特性に応じて街路の仕様を変えている可能性が高い。

### ■遺構・遺物が映し出す城下町の動向

発掘調査を行っているとき、遺構や遺物の様相が他とは異なると感じられる時期がある。まず、江戸時代初期の17世紀前半。もうひとつは江戸時代後期の18世紀後半から19世紀にかけてである。

17世紀前半は近世姫路城下町の成立期、城主でいえば池田氏から第1次本多氏の時代にあたる。城下町の発掘で最も多く見つかる遺構は土坑と呼ぶ素掘りの穴で、壊れた食器など生活残滓の処理に用いられることが多い。しかし、17世紀前半に掘られた土坑には、単なるゴミ穴とは考えにくい大型のものが含まれている。現イーグレひめじの調査では、一辺6m、深さ18mに達する方形の大型土坑が見つかり、中からは膨大な量の土器・陶磁器類や瓦、木製品が出土した。城下町絵図によれば、当地は17世紀前半のうちに武家屋敷から公的施設に用途変更されており、改変に際して家財一式をまとめて処分したのであろう。この時期に特徴的な大型土坑は、石高の変化に伴う武家屋敷の減少など、城下町の変貌を映し出したものかもしれない。

いっぽう、18世紀後半から幕末までの約120年間は、最後の城主となった酒井氏の時代である。この時期には前代と比較して遺構の数が増えるとともに、出土する土器・陶磁器類の量・種類も際だって豊富になり、城下町の動きが活発化したことが窺える。19世紀に入ると姫路では藩政改革の一環として殖産興業政策が進められるとともに、独自の焼物、東山焼の焼成が始まった。この時期には全国的に地方窯の操業が盛んになり、各地の多彩な製品が流通した。このように、発掘調査で見つかる遺構や遺物の様相は、当時の社会や経済の動きを如実に反映しているのである。

### ■実態解明が進む外曲輪

姫路城跡の発掘調査は、1990年代までは中曲輪の武家屋敷地を主な対象とし

ていた。しかし、城周辺の整備が一段落した近年は、ビルや商店が立ち並ぶ外曲輪の調査が主体になっており、町屋地域の実像が明らかになりつつある。

本町の調査では、町屋の敷地境とみられる石組み遺構や井戸、埋甕などが見つかった。敷地境の石組みは町屋の嵩上げに応じて改修されており、最終的には80cmもの高さに達していた。また、白銀町では歴代の敷地境が良好に残っており、同じ場所で杭列から素掘りの溝に、さらには石組み溝に造り替えられたことが判明している。これらは町屋内での敷地境の例であるが、北条口二丁目では町屋と武家屋敷地との境界を確認することができた。両者の間には当初、両側に溝をもつ幅4mもの空地が設けられたが、17世紀後半以降には幅1mほどに縮小されていた。

町屋での生活の様子もわかってきた。白銀町の調査では、15個もの甕を埋め込んだ痕跡が見ついている。当地は18世紀以後、「西紺屋町」と呼ばれていた。この遺構が染物製造に関連する可能性も大いに考えられよう。また、福中町や元塩町などの調査では、ふいごの羽口や砥石など、鍛冶に関わる遺物が大量に出土した。姫路城の北東には「鍛冶町」が存在するが、鍛冶活動は城下の各所で行われていたらしい。

本稿でふれた武家屋敷地や町屋のみならず、城門や土塁、堀など城の施設についても発掘調査による考古学的な情報が蓄積されている。今後はこれらを整理し、絵図や古文書の研究成果と総合して姫路城の実像を解き明かしていくことが求められる。

(森)



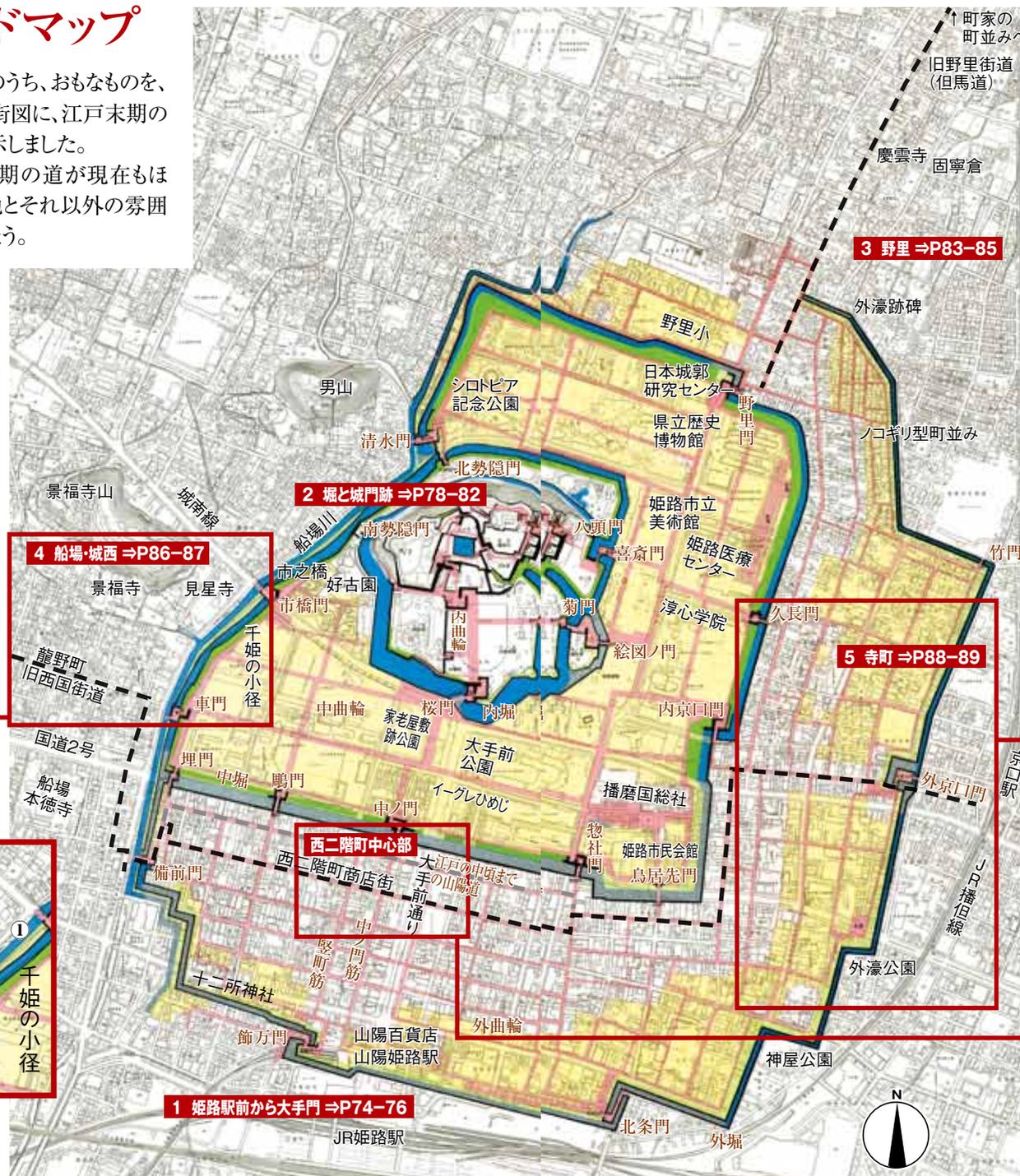
白銀町で見つかった町家の敷地境

# 城下散策ガイドマップ

「城下を歩こう」で紹介の史跡のうち、おもなものを、「姫路城郭図」(最近の姫路市街図に、江戸末期の堀や道路を重ねたもの)の上に示しました。実際に歩いてみると、江戸末期の道が現在もほぼ残っていることや、旧の武家地とそれ以外の雰囲気の違いが感じ取れることでしょう。

凡 例	
	水濠(現存)
	水濠(埋蔵)
	土塁(現存)
	土塁(消失)
	道路(江戸末期)
	武家屋敷地帯
	石垣(現存及び消失を含む)
	寺・神社

本図は寛延4年~宝暦4年「姫路侍屋敷図」による



- ① 正明寺
- ② 妙立寺
- ③ 妙善寺
- ④ 圓光寺
- ⑤ 本領寺
- ⑥ 法華寺
- ⑦ 妙國寺
- ⑧ 大法寺
- ⑨ 妙行寺
- ⑩ 善導寺
- ⑪ 正法寺
- ⑫ 妙円寺

- ① 国府寺家
- ② 札の辻案内板
- ③ 高札場
- ④ 三木家
- ⑤ 富屋
- ⑥ 那波家



- ① 千姫像
- ② 炭屋橋
- ③ 船入川之碑
- ④ 「西国街道」モニュメント
- ⑤ 船つなぎ石
- ⑥ 初井家住宅
- ⑦ ノコギリ型街路



## 城下を歩こう

### 1 姫路駅から大手門 ——「外曲輪」をたずねて

#### ■姫路駅から中ノ門筋へ

姫路城の縄張を簡単に説明すると、天守が築かれている姫山を中心に左回りのらせん状に三重の堀を巡らせ、内堀の中を内曲輪、中堀の中を中曲輪、外堀の中を外曲輪としている。そして内曲輪に居館や蔵、中曲輪に侍屋敷、外曲輪に町人屋敷や寺院、その外縁部に侍屋敷や足軽らの組屋敷を配置。外堀が城と城下町全体を取り囲むという総構式の構造になっている。

この「城下を歩こう」は姫路駅から大手門まで、大半が町人地だった外曲輪を歩くことになる。

JR姫路駅を降り立つと正面に平成の修理で美しく蘇った姫路城の大天守が見える。城に向かって幅員50mの大手前通りが南北に伸びてい



現在の大手、大手前通り

るが、これは1955（昭和30）年に完成した後世の大手の通り。藩政時代はこの通りを一本西に入った南北の道、中ノ門筋が大手門通りだった。

その中ノ門筋を目指して大手前通りを北に向かう。左手の山陽百貨店の前から通りを横切る横断歩道の辺りが外堀の通っていたところで、JRの線路の北側を東に北条門まで伸びていた。

百貨店の角を左折して中ノ門筋に出る。現在は百貨店が建っているが、南側は行き止まりになっているが、2003年に作成された姫路市の「姫路城の縄張り（堀と城門の配置）」（かつての堀や城門の位置が2003年当時の市街地の地図に落とし込んである）を見ると、西側の山陽姫路駅のホームの辺りに飾万門があり、外堀は城下の西にあった備前門から左回りに飾万門の際まで続いてきたようだ。

#### ■賑わった城下の中心街

ともあれ中ノ門筋を北に歩いていく。ビルが林立する大手前通りに比べると裏通りの感否めないが、小さな商店や飲食店が並び、やがて西二階町商店街と交わる。東西に続くこの商店街の通りが実は江戸時代の山陽道（西国街道）だった（江戸の



中ノ門筋

中頃までは一本北側の綿町から本町、坂元町と続く通りが山陽道だった。いずれにせよ、東西を結ぶ山陽道と南北の基幹道路である中ノ門筋がぶつかるこの周辺が当時の姫路城下の中心で、那波家、国府寺家、三木家など苗字帯刀を許され、大年寄を務めた有力町人の屋敷が集まっていたのである。

まず中ノ門筋の西側に、西二階町に面してあったのが那波家。那波家は赤松氏の一族、宇野氏の出自で、山陽道の本陣を務めるほか酒造業や回漕業にも携わっていた。西二階町には他にも内海庄右衛門が1684（天和4）年に開業した富屋という薬種店があり、「とみや薬舗」の名で近年まで営業を続けていた。店先にその案内板も立っている。

中ノ門筋をさらに北に進むと本町に出て、山陽道の旧の道筋と交わるが、その北東角にあるのが「札の辻」の案内板。札の辻とは、この辻に幕府や藩が定めた法度や人相書などを掲げた高札場があったことに由来す

るが、実際の高札場は辻の南西角にあり、少し南には「お夏清十郎」の物語で知られるお夏の実家、米問屋但馬屋があったという。

また、その本町の旧西国街道筋の南東の角地にあったのが国府寺次郎左衛門の屋敷。本陣も務めた国府寺家の敷地は中ノ門筋から大手前通りの東端まで東西約65mに及んでおり、大手前通り西側の歩道に「国府寺家本陣跡」の案内板が立っている。そこから東へ行くと綿町で、ここには江戸末期に姫路藩の家老河合道臣（寸翁）が財政改革の一環として設けた「切手会所、国産木綿会所跡」があり、さらに東に向かえば播磨の総鎮守である「播磨国総社（射楯兵主神社）」が鎮座している。

#### ■豎町筋へ

中ノ門筋に戻り、そこから北へ、かつての中堀を埋め立てた国道2号を渡って城門の一つ、中ノ門の跡を抜け、中曲輪に入っていく。

中ノ門跡からしばらくいくと家老屋敷跡公園。家老職の家柄で、代々隼人を名乗った高須家の屋敷跡で、城の南側にはこうした高禄の家臣の屋敷が配置されていた。右前方には大手門（桜門）も見えるが、中ノ門から入ってくると屋敷に塞がれていったん行き止まりとなり、大手門

へはそこから鍵型に折れて進むしかない。この辺りの周到さにも目を向けたところだ。

家老屋敷公園の西側から南に戻って国道を渡ると堅町筋。中ノ門筋と同様、姫路城下の南北の基幹道路で、有力町人の屋敷が多かったのも同じ。初めに挙げた三木家もその一つで、堅町筋と山陽道が交差する角にあり、本陣（椀箱屋）を務めていた。堅町筋には他にも姫路城ともゆかりの深い長壁神社がある。

#### ■西二階町から備前門へ

堅町筋と別れを告げ、西二階町の通りを西に進み、福中町に出る。城下における山陽道の西端で、旅籠や馬の取次、人足問屋などがあって「旅籠町」とも呼ばれていたという。

福中町の西には船場川が流れ、隣接する県道62号（通称「産業道路」）の歩道上に新しく「備前門橋跡」の碑が立っている。備前門（後に福中門と呼称変更）は外堀と船場川に面した城下の西の玄関口にあたる門で、2014年に県道整備事業に伴う発掘調査が行われ、備前門にかかる木橋の土台などが見つかっている。

外曲輪の西側には船場川と並行して外堀が南下していたが、大半は埋め立てられてしまっている。わずかに備前門跡の南側に数十mにわたって残っているが、外堀を埋めて造

成した大蔵前公園の下で暗渠になってしまう。大蔵前とは藩政時代に船場川のほとりに藩の米蔵が並んでいたことに由来し、江戸時代の牟の跡である公園の中には姫路藩において尊王攘夷活動の指導的役割を果たし、甲子の獄で切腹を命じられた河合惣兵衛らの「勤王志士終焉之地碑」が立っている。

市街地内の外堀の大半はもはや姿を消しているため、例の「姫路城の縄張り」の図版に頼るしかないのだが、これによると外堀は十二所神社の西側から忍町市場街の北を通して、最初に触れた飾万門に至っている。

十二所神社は平安時代に創建された由緒ある神社で、戦災や外堀の埋め立てなどによって社域は縮小されてしまっているが、境内に播州皿屋敷のヒロインお菊を祀るお菊神社があることでも知られている。

忍町市場街は、昭和初期から30年代にかけて卸売市場として賑わった界隈だが、「外曲輪の外縁部には侍屋敷や足軽らの組屋敷を配置した……」の縄張を物語る一つで、忍びの者が置かれたという町。今は多くが消えてしまったが、外曲輪の町人地には白銀町、魚町、呉服町、紺屋町など城下町時代を偲ばせる町名や、茶町や俵町など今はない町名碑も残っている。そのあたりも含めて「城下を歩こう」を楽しんでほしい。（谷川）

#### コラム

#### 天守の妖怪と宮本武蔵

「姫路におさかべ赤手拭と八童もよくしるところなり」。妖怪画で知られる浮世絵師、鳥山石燕は『今昔画図続百鬼』の中の「長壁」にそう記した。この言葉は平賀源内の『風流志道軒伝』にも登場する。石燕の「古城にすむ妖怪」長壁は年老いた鬼女の相貌を持ち、上臈姿で御簾の内に座す。御簾を片手で巻き上げ外を窺っている図像は評判を呼んだらしく、大田南畝の友人、平秩東作は「おさかべは幾歳へたる香炉峰すだれを上ぐる雪のふる城」と狂歌に詠んだ。草双紙の「天怪着到牒」には「こわいもののおやだま」とあり、真の姿を見るとたちまち命を取られるとされている。

この妖怪は、現在長壁神社が祀られている姫路城大天守の最上階に棲むと信じられ、平戸藩主松浦静山の『甲子夜話』など多くの随筆にも取り上げられた。池田輝政宛てに送られてきた「天狗の手紙」など、実際の出来事が背景となって生まれたと考えられる。姫路城にまつわる怪談は、早くから語られていたらしい。江戸初期に刊行された『諸国百物語』に、「播磨国池田三左衛門殿わづらひの事」「播州姫路の城ばけ物の事」の2話が載っている。美女や座頭に化けた鬼神が登場するが、固有の名前はない。前者は、輝政の発病と城での祈祷という史実を下敷きにしている。後者は若侍が城主の命令で一人怪しい灯がともる天守に登っていくというもので、幻想文学の大家、泉鏡花の『天守物語』へと昇華していく。

このモチーフは江戸後期に話芸として確立する講談にも取り入れられ、剣豪宮本武蔵の武者修行におけるエピソードの一つとして明治期に入って人気を博した。幕末の錦絵「佐々木宮本英勇二刀伝」（歌川豊国画）に網干で療養している武蔵の元を老狐の化けた美少年が訪れる話があり、武蔵が相対する長壁明神に化けた妖狐とのかかわりが注目される。物語の中で武蔵は、真の長壁明神からその武勇を賞される。播磨に縁の深い武蔵は、大天守の最上階へ登って妖怪を退治し、長壁明神と対面する勇者にふさわしい人物に違いない。

（挿図）



「東錦昼夜競（あずまにしきちゅうやくらべ）小刑部姫」1886（明治19）年、揚洲周延画、個人蔵

## 2 堀と城門跡 ——「縄張」を体感する

前項の「姫路駅から大手門」でも触れたように姫路城は内堀、中堀、外堀の三重の堀を左回りのらせん状に配し、内曲輪、中曲輪、外曲輪を囲む縄張を施している。

築城にあたっては、まずこれらの堀を掘削し、掘り上げた土を固めて堀の内側に土塁を築いた。内堀沿いの土塁の内側は土のままに、堀に沿う外側には石を積んで石垣とした。中堀・外堀沿いの土塁は城門の付近のみに石垣を施している。

各曲輪には要所に城門が設けられた。内曲輪には八頭門、桜門、絵図ノ門(絵図門)、喜斎門、南勢隠門の5門を配した。続いて中曲輪には市橋門(市之橋門)、車門、埋門、鷹門、中ノ門(中門)、惣社門(総社門)、鳥居先門、内京口門、久長門、野里門、清水門の11門を置き、外曲輪には備前門、飾万門(飾磨津門)、北条門、外京口門、竹門(竹之門)の5門を置いた。

中曲輪と外曲輪の城門は、鳥居先



堀の水源の、水が湧く池

門以外はすべて枡形虎口で嚴重に固めた。枡形虎口とは虎口(曲輪の出入口)に設けられた方形の空間のことで、姫路城では概ね、ここに向きを違えた外門と内門を構築し、外門から枡形内に攻め入ってきた敵を混乱させ、包囲し、討ち取る構えを見せた。

### ■まずは内堀めぐりから

前置きはこれぐらいにして、姫路城の堀と城門(跡)巡りを内堀から始めることにしよう。参考にしたのは前項でも用いた2003年に姫路市が作成した「姫路城の縄張り(堀と城門の配置)」。かつての堀や城門の位置が当時の市街地の地図に落とし込んであるもので、明らかな痕跡が残る堀や城門跡以外は、この図版で推し量っていくしかないようだ。

これによると内堀は姫山北東の、今はない八頭門の北側から発している。八頭門は現在の姫路神社の西方にあったようで、確かに付近にこんなと水が湧く池があり、そこから水が小さな滝になって内堀に注いでいる。つい見過ごしてしまいそうだが、これが堀の水源なのかもしれない(現在は城の西を流れる船場川から水をポンプアップしている)。

ちなみに姫路神社は酒井家代々の姫路藩主を祀る神社で、境内には江戸末期に藩政改革に腕を振るった家老の河合道臣(寸翁)を祀る寸翁神



姫路神社の酒井宗雅の像



内堀(勢隠堀)



北勢隠門

社があり、茶人大名として有名な酒井宗雅(忠以)の像も立っている。

### ■北勢隠門、南勢隠門

内堀はここから姫山樹林の麓を左回りに巡っていく。内堀とその北側の土塁に挟まれた細く湾曲した一画で、現在は姫山公園の名前で市民に親しまれているが、本来は曲輪の一

つである勢隠曲輪。城の背後の防備を担う役目を持ち、曲輪内の内堀は勢隠堀とも呼ばれている。

北側には土塁が続くが、途中で途切れて曲輪外に出られる場所がある。左右を切り込みハギの石垣で固めているが、ここが北勢隠門の跡で、そこを抜けると清水門跡やシロトピア記念公園方面に出ることができる。

ともあれ、そのまま内堀沿いに公園内を西へ歩いていくことにする。春には桜、秋には紅葉が美しい一角で、まもなく前方に別の石垣が現れる。勢隠曲輪の西南に開かれた南勢隠門の跡で、防御上の観点から前方が見通せないよう石垣が鍵型に組み立てられており、「見通しが悪いため通行にご注意」の看板が立っている。

### ■大手門へ

南勢隠門を抜けると堀の対岸は樹林から石垣に変わり、幅も広がって一挙に明るさを増し、道の西側には好古園(姫路城西御屋敷跡庭園)の築地塀が続いていく。ほどなく堀は東へ折れ、大手門の前へと向かうが、この辺りまでくると堀幅も40~50mと広くなり、大手を守るにふさわしい威容を湛えている。行楽シーズンには観光和船の姿も見え、違ったアングルでの姫路城見物が人気を呼んでいる。

やがて大手門に向かって内堀に架



桜門（大手門）、桜門橋



動物園内へと入る内堀

けられた桜門橋が見えてくる。大手門、と記したが、この呼称は厳密には正しくない。姫路城の大手は桜門と桐二門、桐一門の三つの門で二重の枡形を構えていたが、明治になって城内に駐屯した陸軍の手で破却されてしまい、1938（昭和13）年になってようやく再建されたのがこの門。なぜか桐二門があった場所に一つだけ再建され、大手門と呼び習わされるようになったものである。

内堀はここから姫路動物園に入り、園内を北上していく。姫路城の御事所出丸があったところで、出丸を囲むように東側にも堀があり、そこにあった絵図ノ門から出丸に入り、菊門を抜けて三の丸に入ったというが、東側の堀は埋められていて、絵

図ノ門がどこにあったかは定かでない。ただ菊門は出丸と三の丸を結ぶ土橋の先にあったといい、土橋の跡は現在もホッキョクグマの園舎の手前に残っている。

### ■中堀めぐりへ

土橋の跡を越えて内堀はなおも北上し、やがて二手に分かれる。一つは本丸の真下まで斜めに走って行き止まりとなり、もう一つはそのまま北へ喜齋門に至り、中堀となって美術館の裏を北上。県立歴史博物館の手前で西に折れて北勢隠門跡まで直進していく。この間の堀を「外側の内堀」といい、堀の内側には総石垣の土塁が続いていく。

やがて中堀は北勢隠門跡から西に向かい、船場川の手前を川に沿って南下していく。堀と川の間には細い道が続く。道の両側に千姫ゆかりの姫路城西の丸や千姫天満宮があることから「千姫の小径」と名づけられているが、春の桜をはじめ四季折々の表情が美しい散策路でもある。

やがて堀は市橋門跡に出る。石垣しか残っていないが、その昔は木の橋だった市橋の東端に設けられていた門で、コンクリートに姿を変えた現在の市之橋から北を望むと、船場川、千姫の小径、中堀が一望でき、川の西側には町家らしき民家もあって城下町らしい美しい構図を見せて

いる。

### ■国道2号は中堀の跡

堀沿いの小径をさらに南下し、車門跡に至る。中曲輪の西側を固めていた門で、今も石垣部分が残りの南北にははっきりとした形で二つの枡形を認めることができる。北の枡形に車が通行できる橋と車道門があったことからその名が付いたといわれ、池田輝政が姫路城を築城する際も、必要な資材をこの門から車で搬入したという。

車門の先から中堀は埋め立てられており、痕跡を伝えていくと国道2号に行き当たる。東西に走るこの国道が中堀の跡で、大正時代から埋め立てが始まり、1932（昭和7）年に竣工している。水を張った堀の面影は全くないが、国道の北側には惣社門跡あたりまで土塁が続いており、かつては堀だったという面影を宿している。

その国道、つまり中堀に入っすぐ東にあるのが埋門跡で、そこから東へ、鷗門跡、中ノ門跡と中曲輪を守っていた城門の跡が続いていく。

大手前通りを渡って、なおも国道沿いに歩いていく。しばらくは北側に土塁が残っているが、市民会館の西に位置する惣社門跡あたりで姿を消してしまう。わずかに門の跡を偲ばせる石垣が残っているが、実は往

時の中堀は惣社門の東で南に折れており、堀を国道に変える際、道を一直接線にするために邪魔になった北側の石垣や土塁を取り除いたのだという。注意深く足元を見ると、歩道にかつての石垣の位置を示す鉄平石（てつぺいせき）が張られており、堀と石垣が南東方向に斜行していたことが分かる。

### ■城下町の風情が残る久長門辺り

惣社門跡から鳥居先門跡へと続いていくが、堀の面影は何一つなく、播磨国総社の東側から北に上った辺りであろうやく水を湛えた中堀と出会う。堀に沿って進むと賢明女子学院の通用口があり、ここにあったのが内京口門。京に通じる山陽道（西国街道）に向かって開かれていたのでこの名があり、堀はそこから鍵型に北へ折れていく。久長門跡から現在の竹田橋へと続いていくが、堀幅も広く、いかにも水堀らしい風情で、対岸は木々が鬱蒼と茂る土塁。観光客の姿は見かけないが、かつての城下町らしい風情を今もって堪能できる稀少スポットである。

やがて中堀は古い町家や商店が残る野里地区（のざと）を西へ抜け、県道で一度途切れた後、野里門跡から再び西に進んでいく。坊主町（ぼうずまち）と呼ばれるこの辺りも堀の内側は木々が生き茂る土塁になっており、樹影が水面を覆い、堀は暗く静まり返っている。

### ■外堀めぐりへ

そこから細い路地を進んで清水門跡に出る。近くは播磨十水の一つである「鷺の清水」の井戸があったことから命名されたといわれ、石垣の手前に井戸が復元されているが、その西側を船場川が3周目の堀、外堀の役目をして南に向かっている。

ここから再び船場川に沿って「千姫の小径」を進み、国道2号に出る。中堀のところでも紹介した埋門があり、埋門から南には船場川と並行して外堀が設けられていたというが、ほとんどが埋められていて往時の姿を見出すことはできない。わずかに備前門跡南側の緑橋の付近にそれらしきものが残るが、残念ながらそこから外堀は東に折れ、大蔵前公園の下を潜って暗渠となってしまふ。

このあたりについては前項でも記しているので省略するが、図版「姫路城の縄張り(堀と城門の配置)」によれば、外堀はこの後、十二所神社の西側から忍町市場街の北を通過して山陽姫路駅のところにあった飾万門に至り、そこからJR神戸線の北側を一気に東に走り、JRの線路を跨いでいた朝日橋付近にあった北条門へと向かっていた。

もちろん、この間の外堀は埋め立てられており、ようやくJRの高架下の旧朝日橋跡で外堀川として地上に顔を出し、「左回りのらせん」の形で

北東方向へ何度か鍵型に折れ、外濠公園を経て北上を続ける。ちなみに途中にある外濠公園には姫路藩の尊王派のリーダーで、「甲子の獄」で自刃した河合惣兵衛の頌徳碑が立っており、姫路藩の幕末の歴史を窺い知ることもできる。

### ■「堀留」にて堀と城門めぐり終了

ここから外堀はさらに北上するが、この間の外堀は明治初年の生野鉦山寮馬車道(銀の馬車道)築造のために埋め立てられ、堀幅がほぼ半減して外京口門に至っている。内京口門と同様、京に通じる山陽道沿いに設けられたのでこの名がある。

堀はさらに北進し、竹門跡に出て西に折れていく。竹門は姫路城の鬼門筋にあたり、鬼門は木門に通じるので竹(他家)門にしたとも伝えられている。

ここから外堀は堀とは思えないほど細くなって西に向かい、さらに途中で北に折れ、米屋町と野里堀留町の境で文字通り「堀留」となる。傍らに「姫路城外濠跡」の碑が立っている。

紙数に限りがあるので最後は駆け足になってしまったが、姫路城そのものとはまた違った面白さが発見できる堀と城門跡めぐり。広範囲にまたがっているので、観光レンタルサイクルなどを利用して、ぜひその魅力に出会ってほしい。(谷川)

## 3 野里——職人の町、街道が通る交通の要所

姫路城東に位置する野里地区は、古い町家が軒を連ね、城下の面影を今に伝える情緒あふれるエリア。近年、地元住民らでつくるNPO法人野里まちづくりの会(瀬澤義和理事長)がまちなみの保存・再生に熱心に取り組んでいることで注目されている。古くは『播磨国風土記』に「大野里」として登場し、増位山随願寺の門前町として、また交通の要所として栄えてきた野里。城と併せて訪れ、ゆっくり散策したい。

### ■野里門跡

まず訪ねたいのが、日本城郭研究センター・城内図書館すぐそばの「野里門跡」。ここにはかつて城門があった。姫路城主・池田輝政が築城を始めた際、野里村の西部の地域を町として形成し、従来の街並みを城下町の一角として組み込んだ。野里門は野里と姫路城武家屋敷との間に設け



野里門跡

られ、出入り口に当たるので「野里門」と名付けられた。

現地には今、「野里門跡」の史跡看板が立っている。それによれば、往時の堀の姿は鍵型に屈曲して土橋が設けられており、外門は脇門付の高麗門で、内門は脇門付の櫓門だったという。

### ■見ごたえある町家建築

往來の激しい県道518号を避け、1本東の通りを北方向へ。旧野里街道(但馬道。「生野道」とも)に当たるこの通りの両側には趣のある古い町家が建ち並び、その間に商店が点在し、全体として野里商店街を構成している。旧姫路城下町は、1945(昭和20)年7月の空襲で大部分が焼失したが、野里地区は幸いにも難を逃れ、古い町並みと町家遺構が数多く残った。

少し歩くだけで出合える漆喰塗りの壁、袖壁、格子窓、火灯窓、虫籠窓……。他所ではなかなか見られない貴重な町家建築を一気に観賞できる貴重なスポットと言える。しかも驚くべきことに、それらのほとんどが現住といい、状態も良好。古き良き丁寧な暮らしがここにある。

このエリアを代表する町家が、国登録有形文化財の「芥田家住宅」「魚橋家住宅」「魚橋呉服店」、姫路市都市景観重要建築物の「大野家住宅」。



大野家住宅

「芥田家住宅」の当主は代々鋳物師の棟梁を務め、大坂の陣のきっかけとなった京都方広寺大仏殿の鐘の鋳造を手掛けたことでも知られる。また、「魚橋呉服店」は呉服商が建てた住宅。商店街全盛期の商家の趣を今に伝える。「大野家住宅」の当主は江戸・元禄期から戦前まで鋳物屋を営んでいた。現在、1階部分は地域のさまざまなイベントに利用されている。

### ■慶雲寺・光正寺

界限には寺社仏閣が数多くある。旧野里街道を少し東へ入ったところにあるのが慶雲寺。1443（嘉吉3）年の創建で元は天台宗の寺院だったが、1577（天正5）年に南室和尚が中興し、臨済宗妙心寺派の寺になった。その後、名僧南室和尚の徳をたたえ、姫路城主・池田輝政が姫路城築城の際の木材を寄進して再建したのが現在の本堂であり、禅の道場として修行者を応接、指導したという由緒を持っている。

境内には、井原西鶴の『好色五人女』

などで有名な、姫路城下で起きた悲恋物語の主人公、お夏と清十郎の霊を弔う「お夏・清十郎比翼塚」があり、毎年8月9日に「お夏・清十郎祭り」が開かれている。

慶雲寺近くの光正寺はかつて慶雲寺の塔頭で、現在は観音堂という位置付け。比翼塚はもともと光正寺にあったとのことで、悲恋物語の代名詞として舞台化されることが多かったせいか、境内の階段玉垣には幕末の頃の歌舞伎・浄瑠璃関係者の名前が刻まれている。

### ■固寧倉

慶雲寺前の通りをそのまま東へ行けば、市指定重要有形文化財の「固寧倉」がある。固寧倉とは、姫路藩が飢饉に備えて建てた備蓄倉庫のこと。酒井家は、前橋藩（群馬県前橋市）時代の1685（貞享2）年、低利貸付制度である社倉法を実施し、姫路転封後も同様の制度を施行していたが、備荒貯穀のための倉庫設営を町村組大庄屋らが家老河合寸翁に建議した。藩主酒井忠道がこれを取り上げ、各村からの創設願を受けて1カ村または2～3カ村に1カ所の割合で整備。1846（弘化3）年までに288カ所を数えた。

### ■ノコギリ横丁・あてまげ

旧野里街道から離れた一見現代風

の住宅が立ち並ぶ区域にも、歴史ある城下町の面影にふれられる場所がある。金屋町、八木町、福居町、橋之町、福本町、米屋町などの住宅街にある「ノコギリ横丁」。家屋が道路に対して斜めに建ち、隣家との間に小三角形の空き地を生じ、町並みがノコギリ状に斜行して形成された。形成された理由は軍事説・地割説・方位説などがあり、はっきりしないという。

ノコギリ横丁の少し北に残る「あてまげ」も興味深い。道路が直行せず、少しずれた形で道が付けられている場所のこと。姫路城の守りの1つで、敵の進攻をここで鈍らせ、挟み撃ちにするために造られたという。

その北側は堀の最終地点である野里堀留町で、郷土出身の清水公照（元東大寺長老、華厳宗管長）揮毫の記念碑が建っている。

### ■日吉神社

野里地区の最北にある日吉神社は、840（承和7）年に増位山随願寺の鎮守として比叡山の山王神社から勧請され、山王権現と称した。天正年間に三木城の別所長治の手によって焼失し、1601（慶長6）年に池田輝政が再興した。1868（明治元）年に日吉神社と改称。小児の夜泣き、癩虫・引付など虫封じの神様として崇敬を集めてきた。

毎年6月5日、子どもの健やかな成長を願い、ハナショウブで邪気をはらう「しょうぶ祭り」が境内で執り行われる。

### ■明珍本舗

日吉神社近くには、兵庫県の伝統工芸品「明珍火箸」の工房「明珍本舗」がある。明珍家は平安時代以来、甲冑師として名高く、前橋の酒井家に仕え、酒井家の姫路入封に伴い、野里に居を構えた。現在もその伝統の技を継承し、火箸や風鈴、花器などの製作に当たっている。

### ■いにしえ伝える野里の町名

1981（昭和56）年に行われた行政による区画整理や住所表記の変更で、姫路市では城下町時代の地名を含め、多くの町名が失われたが、野里地区は多くが昔のままの町名を残している。野里寺町、鍛冶町、鍵町、五郎右衛門邸など、現在29の町がある。

それぞれの町名にはその地区の歴史・風土があり、職業、商業、商品名、社寺名、個人名などに由来するものが多い。町中の随所に町名由来を解説する案内板が立っている。それらを参考にしながら、昔の庶民の営みを想像しつつ歩くのも一興だ。

（藤本）

#### 4 船場・城西—— 西国街道と水運で栄えた町

姫路城の西にある「船場・城西」地区は江戸時代、播磨灘の飾磨港と船場川で結ばれ、水運で栄えた。ここは西国街道沿いの商業地としても発展し、立派な商家などが建ち並んだ。太平洋戦争での空襲被害が少なく、今も近世の面影を残す。姫路城から歩いて訪ねてみよう。

姫路城の大手門前から西に向いて出発。姫路城西御屋敷庭園・好古園の前を過ぎ、5分少しで擬宝珠のある市之橋に着く。そこから見下ろす船場川は浅く、透明な水がさらさらと流れていた。川沿いには千姫像



懐かしい町並み



初井家住宅

がある。正座した着物姿のかわいらしい像だ。

そのまま南へ進むと、船場川に合流する水路が見えた。そばには「船入川之碑」。江戸時代に船着き場ができ、荷物の積み下ろしをした場所という。水路に架かる炭屋橋には船で俵を運ぶ絵が刻まれ、往時を想像させる。この西には見星寺がある。室町時代から続くとされる臨済宗の寺院で、1749（寛延2）年の洪水で犠牲になった337人を弔う「菩提所碑」が境内に立つ。

炭屋橋の南には「西国街道」のモニュメントが設置されており、その矢印に従って右へ。高瀬船をつないだという大きな「船つなぎ石」があった。旧西国街道は、船場川に突き当たるこの東西の道。街道南側の立派な町家「初井家住宅」が目を引く。姫路を代表する歌人初井しづ枝（1900～76）が暮らした。初井は、英賀屋の屋号を持つこの家に嫁いだ後に短歌を始め、北原白秋に師事した。建物は非公開だが、ここから北に歩いて約10分の姫路文学館で、初井に関する展示を見ることができる。

初井家の主屋は江戸末期の建物だという。正面の格子は繊細で、その外側を太い結界格子が囲む。2階には漆喰で塗られた重厚な虫籠窓。軒下の格子の落ち着いた木の色と、漆喰の白とのコントラストが美しい。



景福寺山門



のこぎり横町

玄関に近づくと「初井しづ枝」の表札を今も掲げていた。ここ「龍野町」の町名由来の説明板もあり、龍野に通じる道に当たるからという説、龍野から移り住んだ人がいたからとの説を紹介している。1580（天正8）年、秀吉が龍野町に「楽市」の制札を出し、その後、江戸時代には姫路の代表的な商店街として栄えた。

この説明の通り旧西国街道沿いには古い町家が多く、城下町の風情を残す。途中、和菓子店の角を右に折れ、少し狭い道の先に見えるのが景福寺。古くは摂津にあったが戦国時代に播磨へ。18世紀中頃に現在の場所に移り、姫路藩主酒井家の菩提寺になった。古い山門の左右に仁王像が立つ。鎌倉時代の作とされ、朽ちた様子が

歴史を感じさせる。

境内にはクスノキなどの巨木があり、小高い景福寺山を背景に本堂が座る。曹洞宗の禅寺らしく古い時代の坐禅堂も。山門手前の右手は、徳川家齊の娘で酒井忠学夫人となった喜代姫ら3夫人の墓所。大きな石を積み上げた墓碑が並ぶ。

西国街道の一本北側の道を歩く。ここは江戸時代初めに作られた街路で、家々の軒先がずれて、のこぎりの刃のような形になっている。城下町の防御のためだといい、現在は道路の形が分かりやすいような舗装が施されている。

最後に「船場御坊」の名で親しまれる船場本徳寺を訪れよう。西国街道に並行する国道2号を南に渡ったところにある。浄土真宗大谷派（東本願寺）の別院。東側の表門から境内を望むと、雄壮な本堂が目に入ってくる。入母屋造りの巨大な屋根が緩やかな曲線を描き、風格をたたえる。この寺は、姫路藩主本多忠政が百間四方の土地などを寄進し、1618（元和4）年に建立された。本堂は1718（享保3）年の落成で、表門、鐘楼、大玄関を合わせた4棟が17～18世紀のものという。

ここからの帰途は、旧西国街道の西二階町商店街へ。老舗が並ぶ通りをぶらりと歩き、南に折れれば15分ほどで姫路駅に着く。（松岡）

## 5 寺町—— 池田輝政がつくった町

姫路藩主となった池田輝政は、城下町を建設するにあたって城の東の外曲輪に寺社地を置き、内曲輪と中曲輪にあった寺社仏閣を立ち退かせてそこに集め、いわゆる「寺町」を形成した。これは城下の外縁部に寺院を配置し、外部からの敵の侵入など有事の際には寺を砦として機能させようというもので、城下町の特徴の一つでもある。

移されたのは宿分院（願入寺）、正明寺、善導寺、正法寺などで、姫路以外からも池田家ゆかりの寺が入った。輝政夫人の督姫が熱心な法華宗信者であったため、法華宗寺院が多



寺町筋（五軒邸）



正明寺

く、妙立寺、妙善寺、法華寺、妙国寺、妙行寺、妙円寺の6寺が入っている。

姫路城下の寺町は、現在の地名でいうと北の五軒邸から南の坂田町、平野町にかけての道筋で、今回はそこを歩くべく美術館南側の喜齋門跡から東へ、姫路医療センターと淳心学院の間を抜け、久長門跡を進み、南北に寺院が連なる五軒邸に出る。

### ■姫路城築城史料の伝わる正明寺

一番北にあるのが天台宗の古刹、正明寺。かつては姫路城が立つ姫山にあり、称名寺と称していたが、1346（貞和2）年に赤松貞範が姫山に構を築くときに山下に移され、16世紀半ばに黒田職隆が姫山に新城を築く際にも再び移転。輝政の町割によってこの地に移ってきている。

寺には黒田氏の姫路城築城説を裏付ける史料とされる1561（永禄4）年の「助大夫畠地売券」が残るほか、阿弥陀如来坐像を刻んだ1346（貞和2）年造立の板碑（県文化財）もある。

いずれも寺の歴史を物語るが、墓地の一角に幕末の姫路藩にあって西洋式の大帆船「速鳥丸」を建造した秋元安民の供養碑も立っている。弟子たちの建立だそうだが、風化が激しく、剥落も見られる。碑石は姫路藩の専売品だった高砂産の龜山石だそうで、そのあたりにも弟子たちの藩への愛着が垣間見えるようだ。

正明寺から南へ妙立寺、妙善寺、圓光寺、本領寺、法華寺、妙國寺、大法寺と寺院が続く。妙立寺や妙善寺は三河吉田から輝政に付き従ってきた寺である。

### ■姫路藩尊攘志士ゆかりの善導寺

大法寺から南に下り、かつての山陽道を西に歩き、市道城南線を南に渡っていくと坂田町で、妙行寺、善導寺と続いていく。善導寺は浄土宗の寺で、元は榎本（今の姫路東高校付近）にあって榎寺と称していたが、輝政の町割によって現在地に移ってきた。

境内には市文化財の笠塔婆もあるが、姫路藩の歴史上、注目されるのが薬師堂の前に立つ河合惣兵衛の墓。惣兵衛は幕末における藩の尊王攘夷派のリーダーで、藩内の佐幕派との争いに敗れ、尊攘派への大弾圧（甲子の獄）によって自殺刑を言い渡された人物。寺の墓地には「河合家総墓」もあり、惣兵衛の養子で、甲子の獄で斬首された伝十郎も葬られている。

実は同じ墓地に紅粉屋の墓を発見



池田輝政供養塔（正法寺境内） 池田輝政位牌（正法寺）

紅粉屋又左衛門なる藩の御用商人が伝十郎ら尊攘派の天誅を受けているので、敵同士の墓が同じ寺にと歴史の皮肉を感じたのだが、同じ紅粉屋でもこちらは重右衛門。紅粉屋の庶流だという。

### ■池田輝政供養塔の伝わる正法寺

善導寺から国道2号を渡って平野町に入ると正法寺、妙円寺と続く。正法寺は古くは現在の別所町佐土にあり、その後総社西門近くに移り、輝政によって寺町に移された浄土宗の古刹。境内に輝政を火葬した市之郷から移されたと考えられる供養塔があり、風化が進んでしかとは読めないが、地輪（台石）の中央に「泰叟玄高居士」、左右に「慶長十八癸丑年正月廿四日」と、輝政の法名と命日が刻まれている。同じく位牌も伝わっており、文字はほとんど消えかかっているが、表に輝政の命日が、裏に俗名と行年が書いてある。

こうして今も古い歴史の面影を残す寺町だが、以前は善導寺と正法寺の間に黒田家ゆかりの心光寺（北平野台に移転）、正法寺と妙円寺の間に願入寺があったそうで、寺が隙間なく一直線に連なっていたことが分かる。まさに輝政が企てた鉄壁の防御ラインだったのである。（谷川）